

Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



John F. Kennedy International Airport

《鈍感力と察知力》

今回はニューヨーク生活で芽生えたある力(チカラ)の話。ニューヨークと言えば、一昔前は犯罪多発都市というイメージがあった。今でもけして安全な街とは言えないだろうが、年々開発が進み、街の様子もかなり変わって来ている様だ。むしろ日本の方が物騒な事件が格段に増えて来ている気がする。

渡米前、自分の中でニューヨーク=ジャズ、音楽、演劇、アート等、最先端の文化がいつでも体感できる大都市。そして、夢にまで見た憧れの場所というプラスのイメージがありながら、そのニューヨークで生活する=犯罪多発都市で生き抜いて行かなければならないというリスクも当然感じていた。

あの時、もし恐怖心や不安感ばかりが増幅していれば、ニューヨークで暮らそうなどとは考えもしなかっただろう。その他、住む場所のあてもなく、働くことが出来るのかも分からず、英語力の不安等を含めるとマイナス面の方が圧倒的に多かった

のだが、渡米すると決心してからは、見てみたい場所、ライブを見たいミュージシャン、ジャズ・クラブの場所を確認する等、楽しいことばかり考えるようになり、暇さえあれば『地球の歩き方』をパラパラとめくりながら想像を膨らませていた。こういう所は持ち前の鈍感力が働いていたのかもしれない。また、当時はパソコンやインターネットが登場する前の時代だったため、事件・犯罪のニュースをはじめ、余計な負の情報を入手する手段がなかったことも良かったのだろう。結局、渡米前に不安に駆られるような瞬間はほとんどなかった気がする。不安よりも「夢にまで見たニューヨークに行くんだ!」「あのニューヨークで生活するんだ!」というワクワクした気持ちが圧倒し、これからどんなことが起きるのだろうと冒険心のような気持ちの方が完全に勝っていた。

だが、実際にニューヨークで生活が始まると鈍感力だけでは生き抜くのはかなり難しく、また、危なっかしく、自然と察知力を働かせる必要に迫られた。いきなり銃を突き付けられるようなことはなかったが、当時マンハッタンの東側はアヴェニュー A から東、ウエスト側は 9th や 10th アヴェニュー辺りは危険と言われていた。それぞれストリートやアヴェニューによっては危険な場所もあり、そのような危険なエリアに行かざるを得ない用事がある時は緊張もしたし、自然と辺りの様子を瞬時に感じ取るようになっていた。そして、通りやエリアの雰囲気だけでなく、深夜の地下鉄や人間に対しても同様で、少し離れた場所からでもここは危ないとか、こいつは怪しいとか瞬時に察知するようになっていた。もちろん、それはあくまでも自分だけの感覚だったのだが。

夜中までジャズを聴いて、深夜 1~2 時、時には明け方近くに地下鉄に乗ってアパートに帰ることもしばしばあったが、乗り込んだ車内に怪しげな人間がいれば、車両を移ったりして事前に対処することもあった。もちろん、常にビクビクしていた訳ではないが、日本みたいに車内で居眠りしてしまうなんてことは考えなれなかった。当時は若かったから元気だったこともあるだろうが、歳を重ねて徐々に眠気に耐えることが困難となって来た今なら、居眠りしている数分の間に所持品を全て持ち去られてしまうということも十分あり得ただろう。

また、アメリカ、ニューヨークという場所柄、ゲイの人達も多く、ウェイターの接客を通じて目元やちょっとした仕草、話し方で瞬時に察知するようになっていたが、向こうではだからどうしたという話でごく当たり前の光景だった。そして、皆マナーの良いお客さんだった。ウェイターといえば、英語のヒアリング能力の未熟さで数々のオーダーミスを重ねたことはこの場で何度か触れたが、多大な迷惑を掛けてしまった。申し訳ないという気持ちはもの凄くあったのだが、英語を必死に勉強しようと思わなかったのは持ち前の鈍感力が働いていたのだろう。綺麗な発音とか流暢な英語なんてどうでもよく、必要最低限の英語を駆使して、魂で伝わればいいくらいに思っていたからタチが悪い。その辺りの考えは今もあまり変わっていないかも知れない。

そんなわけで、鈍感力と察知力で楽しいニューヨーク生活を送らせてもらったが、そもそもほとんど無計画でニューヨークに飛び立ったこと自体、もの凄い鈍感力の持ち主だったのだろう。そして、結局の所、運が良かっただけなのかも知れない。